

東大校友会ニュース

March 2016

U T o k y o
A l u m n i
A s s o c i a t i o n
N e w s

no. 30

contents

- 2 | 卒業生活動から読む
東京大学ビジョン2020
- 4 | 挑戦する「東大発ベンチャー」
- 8 | ホームカミングデイ2015
特別フォーラムダイジェスト
- 10 | 同窓会だより
同窓会活動・設立レポート
- 11 | 外国人留学生支援基金って？

東京大学ビジョン & 卒業生生活動

新たな価値創造に向けた 大学と卒業生の協働関係の発展

今回のビジョンでは、「学術成果を踏まえた新たな価値創造を推進し、これを広く社会に展開するため、産学官民の連携による協働拠点を形成する。」「関連する研究機関や民間企業、政府等と有機的に連携してイノベーション・エコシステムを充実させ、東京大学の学術成果を活用した起業を促進する。」など、学術成果の社会還元に向けた方針が強く打ち出されています。オープン・イノベーションの環境の中、卒業生にはご自身の機会として関与頂きながら、新たな協働関係の一翼を担っていただくことが期待されます。産学の橋渡し役としての貢献や起業をサポートする卒業生グループの組織化など、仕組の整備に取り組んでいきます。

協働

価値創造に挑む
学術の戦略的展開

卒業生に向けた“学び”の機会の充実

現在、若手ビジネスパーソンターゲットに先端テーマを掘り下げる「東大セルフインベストメント」、広い年代層に向けてリベラルアーツの最新テーマを取り上げる「学び続けるシリーズ」の2つのプログラムを提供しています。今後は、イノベーションや社会課題に取り組む第一線の研究者、起業家等とのインタラクティブな学びを通して、そのテーマに集まる卒業生のコミュニティ形成を意識したプログラムへと強化して参ります。

また先端専門性の高いテーマに一線の講師陣を集める全10回講義の「グレートー東大塾」には、卒業生に向けた大幅な参加費割引特典を用意するほか、昭和28年から続く人気講座の「公開講座」には、卒業生の参加枠を確保するとともに、先行優先申込みを受け付けます。更に、学内数多く存在する公開セミナー情報のポータルをアラムナイホームページに設け、卒業生が東京大学における学びの機会にアクセスしやすい情報環境を整えていきます。

学び

昨年4月から始まった東京大学の新執行部体制のもと、10月に東京大学の中長期方針を示した「東京大学ビジョン2020」が公表されました。新たな価値創造に挑む「知のプロフェッショナル」の育成、卓越性と多様性の相互連環を通じた「知の協創の世界拠点」の構築などを基本理念としながら、〔研究〕〔教育〕〔社会連携〕〔運営〕の4領域それぞれにビジョンとアクションを据え、方向性を示しています。その中に、「卒業生や支援者のネットワークを充実させ、大学との連携・協力を強化する。」として、卒業生に関わるアクションが盛り込まれました。大学の全体方針を受け、東京大学卒業生室では、今後のアクションプランについての議論・検討を進めています。

2020

貢献

卒業生から学生への支援プログラムの拡充

学部学生に様々な体験の機会を与える「体験活動プログラム」は、国内外の多くの卒業生団体がプログラムの企画・運営を担い、卒業生から学生への支援の象徴的な場となっています。今後も更なるプログラムの拡大を目指します。また卒業生による留学生支援など、ボランティア活動促進のサポートも進めてまいります。卒業生がロールモデルを示しながら、学生の将来設計に貴重な気付きを与えるキャリア・メンタリングも卒業生からの貢献が期待される領域です。学生団体「東大ドリームネット」、卒業生団体「三四郎会」が大学とともに開催している大規模な交流会「知の創造的摩擦プロジェクト」に加え、個別のメンタリングニーズにも対応できる仕組みの構築を目指します。

卒業生ネットワークの充実、
海外卒業生へのアウトリーチ促進

現在、東京大学校友会には学部・学科、国内外の地域、運動部・サークル、職域など様々なカテゴリーの300近い同窓会が登録されています。地域同窓会は一昨年、全都道府県に同窓会が出揃いました。卒業生室では東京大学校友会事務局として同窓会活動を支援し卒業生ネットワークの充実に努めます。特に留学生の拡大や海外大学との学術・学生交流など東京大学のグローバルな展開に就いて、帰国留学生を含む海外卒業生へのアウトリーチを促進します。

組織

「知のプロフェッショナル」の育成

強力な卒業生データベースへと
システムを再構築

卒業生活動の最大の基盤は卒業生情報のデータベースです。在学時から卒業後のデータへとシームレスに引き継がれる流れや、今後の卒業生間のアクティブなネットワークに資するデータベースへとすべく、新たなシステムの構築を進めて参ります。これにより大学とオンラインでつながる卒業生の比率を大幅に向上させます。また大学からの情報提供や各種特典などオンラインによる卒業生向けサービスを充実させます。

情報

過去10年余り、東京大学は全学での卒業生ネットワークの拡充に取り組んで参りました。しかし欧米の一流大学に見られる、大学と卒業生の有機的な結合によるダイナミックなエコシステムのレベルに至るには、まだまだ道半ばです。今後、東京大学が日本や国際社会への貢献を高めてゆくために、卒業生ネットワークの存在は欠くことができません。また、生涯の資産となる卒業生メンバーシップの価値も、更に高めてゆく余地を大いに残しています。本稿で紹介の通り、卒業生ネットワークの更なる発展に向け、プログラムを拡充してゆく所存です。卒業生の方々には積極的なご参画を頂けますよう、何卒宜しくお願いいたします。

[東京大学卒業生室 副室長 島田久弥]

価値創造から
社会実装へ東京大学
ビジョン
2020

経営力強化

財源

卒業生活動の財政基盤の強化

大学全体の財政状況が逼迫する中、卒業生活動に向けた財源を独自にも生みながら更に活動を拡大してゆけるよう、財政基盤の強化に取り組んで参ります。具体的には東京大学校友会の活動を幅広く支援し、東京大学コミュニティの活性化を促す東京大学基金「東京大学校友会活動支援プロジェクト」への支援の呼びかけ、ホームカミングデイなど各種プログラムへのスポンサーシップの導入などを想定しています。



挑戦する「東大発 アイデアと技術

したのはこの時が初めてです。自分は学生のときに起業していたので、きっかけや成功・失敗について話をしました。ベンチャーを起すという話に刺激を受けた後輩たちは、講演終了後も私を囲み、自分のプラン・興味についてアツク語りました。彼らを面白いと感じると同時に、ビジネス経験のない後輩たちに、過去の失敗や成功を伝えることが必要ではないか。そう考えて2012年4月にスタートアップを支援する会社を設立しました。

私の役割は、ロケットがブースターと一緒に飛び上がるような気持ちで、時間をかけてベンチャーたちに寄り添うことです。事業を軌道に乗せるまでが大切です。それが自らをスタートアップブースターと名乗る所以ですね。私が支援先のベンチャーたちに出す条件は「途中でやめない」。エンジェル投資家の一番のリスクは投資先がやめちゃうことで、粘り続ける熱意がある人にはいつかチャンスは訪れる。やめさえしなければ、投資分はなんとでもなります。起業家本人も、自分が時間を費やした分ぐらいは回収できるようになると話しています。大切なのは、目指すゴールであり、実際はこうなりたいと描くよりも現実には下になりがちです。大きな変革を引き起こすテクノロジー・ベンチャーに投資しています。日本発で世界初とかいいですね。こうしたコア技術のベンチャーは時間がか

かるので、初期に資金が集まりにくく、そこを支援しています。

最近ではとても起業しやすくなっています。その背景は3つあり、資金面のハードルが下がり、今は資本金1円でも起業が可能になったこと。クラウドファンディングなどで事前資金も集めやすくなっています。次に社会的にイノベーションが望まれていること。それ

から大企業は動きが遅く、ゼロから新しいモノを生み出すことができず、限界がきていること。私が学生の時はベンチャー起業家も少なく、グローバルに育てる人間も環境も少なかったですが、今は先輩が学生に教える機会も少なくないし、産学連携のアクティビティが整備されています。優秀な学生たちが起業するプラットフォームは出ています。

大企業に入るルールは既に先輩たちが作

鎌田富久さん

世界で勝てる
ベンチャーを
日本から育てます。

ったルールであり、東大の優秀な人たちにはルールを作る側になって欲しいと思っています。日本は豊かで能力がある優秀な人なら生活できないということはなく、リスクは少ないと思います。人がやっていないことをやる——。若いときの方がリスクも取れるし、体力も時間もある。ベンチャーを起業するのもいいし、ジョインしてもいい。だから、やるなら少しでも早い方がいいし、私も次の10年のキーテクノロジーとなる分野のベンチャー支援をしていきたい。よく東大の理系研究者には経営がわからないのではないか、と言われるのですが、それは違います。経営は勉強すれば良い。優秀な研究者兼経営者は最強ですよ。

注1: 新境地を開いてきた各界のリーダーと東大生・若手卒業生によるサロン型プログラム。

自分自身は、東京大学理学系研究科の情報科学で情報の視覚化、グラフ描画アルゴリズム等を研究していました。起業のきっかけは大学4年の時。アルバイトの延長で効率よく稼ぐつもりで、コンピューターサイエンスの知識を生かしたソフトウェア会社(現ACCESS)を設立します。ソフトウェアは元手がいらず、当時世界ではマイクロソフトの『プログラムが売れるというモデル』がスタートし始めた時機でもありました。携帯電話でインターネットを可能にするNTTドコモの「iモード」の実現で注目を浴び、世の中の追い風によって2001年、東証マザーズに上場。米パームソース社(PalmOS)などを買収するなど、海外展開も進めましたが、ゼロからの急成長も一段落したところで、2011年10月、50歳を契機に28年間経営していたACCESSを退任しました。

その直後、東京大学のプレミアムサロンのゲストに招かれ、ベンチャーに興味のある在学学生・若手卒業生を前に講演する機会を得ました。若い学生や卒業生たちと接

鎌田氏が支援するベンチャー企業と事業分野(2012～)

企業名	分野
AgiC	ペーパーエレクトロニクス
AXELSPACE	超小型人工衛星活用
Genomedia	ゲノム解析の応用
H2L	電気刺激で手指をコンピュータ制御
LPixel	生命科学の画像処理・解析
Moff	ウェアラブルスマートイ
Mynd	人工知能・機械学習(2015年4月BrainPadが買収)
Pluto	スマホで家電を遠隔操作
SCHAFT	人間型ロボット(2013年11月Googleが買収)
WHILL	次世代車椅子
ユカイ工学	コミュニケーションロボット

ベンチャー」

ここ数年、東大から新しいモノ作り、新しいプロダクトが次々と誕生し、新市場を切り開いていることをご存じですか？

大学も知を基盤とするイノベーションの実現に向けて、ベンチャー育成やベンチャー支援ファンドの支援体制を強化。

大学発ベンチャーの更なる活躍を期待しています。

今回はイノベーションを牽引する若き起業家と、彼らを支援する先輩にスポットを当てました。

学 生時代はコンピュータに夢中で秋葉原に入り浸っていました。

卒業後は沖電気に技術者として就職しました。転機が訪れたのは3年目。シリコンバレーに研究員として社費留学させてもらった時のことです。大学で卒業生たちが学生と活発に交流してイノベーションを起こしている姿がありました。最先端ITの研究に携わりながら、日常的にビジネスの最前線に触れられる。まさに夢のような環境に遭遇したのです。

帰国後、インターネットの勃興とともにITの仕事はうなぎ上りに増えており、面白い仕事もたくさん出来ました。しかし、ITバブルの崩壊後、課題を感じるようになりました。日本の技術者たちは非常に苦しむことになったからです。シリコンバレーではIT技術者は未来社会を創り上げていく誇り高い職種なのにどうも日本は違う。「どうにかせねば」という思いをもって2000年にウルシステムズを起業しました。35歳の時でした。

ウルシステムズは戦略的ITシステムに特化した会社です。業務ITの世界では高度な専門性が要求されます。その中でもビジネスの競争力に直結するコアシステムに対し、私達は最先端の技術を提供しています。そうシリコンバレーのように。

2006年JASDAQに上場し、現在では製造・通信・金融・公共・交通・情報サービスを中心に最先端のITやクラウド事業を展開しています。

私が若手の人たちをサポートしたいと思ったきっかけは、アントレプレナー道場などに呼ばれて講演した時のことです。学生の皆さんにOBとしてなにか出来るのか、貢献できることは何かと考えました。アイデアや技術を持った学生に、起業や経営の生の話を伝えたい。そんな交流の場をなんとか形に出来ないものかと思ったのです。それ以来、ことあるごとに東大を訪問するようになっています。例えば、起業家志望の学生さんたちに月次で会ったり、イケてる起業家たちだけが集まる会を開いたりしています。大学と若手同窓会が共催している「**知の創造的摩擦プロジェクト交流会**」^{注2}にも10年以上継続して参加させていただいています。大学を訪問すると私達も面白い。OB同士の新たな出会いもあります。

主役はあくまで学生たち。何かを成し遂げたい学生たちは、世の中に本気で機会を求めているのがよくわかります。そんな若手を少しでも応援したい——それが私の姿勢です。学生には何が大変で何が面白いのか、オブラートに包まず事実を話してあげる。どんな契約がダメでどう資金を調達したらいいか、どんな仲間が必要か。彼らの契約書をレビューする事もあります。私たちがやるべき事は「俺たちの時代はよかった」と嘆くのではなく「君たちの未来はもっと明るい」と背中を押すこと。

私自身、起業以来様々な困難がありました。迷走したり判断に迷ったり、ヒトの問題で苦労したり。そんな時に支えてもらったのが先輩起業家です。「ベンチャー支援＝お金」と思われがちですが、実際の経験を赤裸々に伝え正しい経営判断を促すことも大事な支援だと思っています。



ベンチャー業界は面白いです。老若男女を問わず、熱い人ばかりです。未来のことばかり話しています。皆がプラスのエネルギーの塊なのです。ベンチャー同士、お互いに元気を共有できます。東大OBネットワークは本当に素晴らしい。大きな夢を持った学生さんには是非このネットワークの醍醐味を感じてほしい。周りを気にせず好きなことを突き詰める。そんなオタク的な生き方こそ、人生を豊かにすることを、心から伝えたいと思います。

注2: 東京大学、東京大学三四郎会、東京大学学生団体ドリームネットが共同で企画・運営。交流会・語る会・講演会の3つからなるプロジェクト。

漆原 茂さん

学生たちは
未来の主役。
直接ふれあう
シナジーが面白い。

Kamada Tomihisa

1989年東京大学大学院理学系研究科情報科学課修士修了。理学博士。(株) ACCESS共同創業者。2012年スタートアップを支援する会社TomyKを設立。

Urushibara Shigeru

1987年東京大学工学部卒。沖電気工業(株)入社後、大規模エンタープライズシステムの構築に多数従事。スタンフォード大学コンピュータシステム研究所客員研究員も務める。2000年ウルシステムズ(株)創業。2006年JASDAQに上場。

AXELSPACE

中村友哉

宇宙業界で日本発
プラットフォームを作りたい

宇宙に興味を持ったのは進学振り分けのガイダンスで、工学部航空宇宙工学科の中須賀真一先生から「一緒に人工衛星を作ろう」という話を聞いたのがきっかけでした。国家レベルのプロジェクトでやるようなものを学生が作るという話に魅力を感じたので、航空宇宙工学科に進学しました。当時、中須賀研究室では超小型衛星プロジェクトへの取り組みが始まっていました。

2003年6月30日、わずか10cm立方、1kgのCubeSatの打ち上げに成功。当初は1週間でも宇宙で生きれば良いと考えていましたが、今も健在です。開発費用が限られていたため、電子部品の一部には秋葉原で買ったものも含まれています。NASA等で使われる宇宙用部品とは値段が2~3桁違いますが、それでも宇宙で動くことが実証されました。博士課程修了までの6年間で3つの人工衛星開発を経験し、この技術を社会で実用化したいの思いから、起業を志しました。

とはいえ、超小型衛星で何が出来るのか、どう使うのが問題です。既存のマーケットもありません。我々の作る超小型衛星のコストは大型衛星と比べて100分の1です



クリーンルームの中村氏。
2016年春に打ち上げ予定の小型衛星「GRUS(グレース)」。

が、それでも数億円の規模です。なかなか顧客も見つからない中、出会ったのが株式会社ウェザーニューズでした。ウェザーニューズは船舶会社に最適な航路情報を提供しており、近年注目を集めている北極海航路を安全に航海するために必要な情報を求めています。しかし大型衛星からの画像を都度購入すると費用が高すぎるという問題がありました。超小型衛星の場合、トータルで考えると情報入手コストが圧倒的に下がることから両者で本格的に検討。2008年8月、正式にプロジェクト開始を決定し、アクセルスペースの設立に至りました。

その後2015年11月に19億円の資金調達に成功し、22年までに50機の超小型衛星を打ち上げると発表。地球上のあらゆる場所の画像を毎日撮影し、毎日の変化をとらえることで得られる情報をビジネスにしたいと考えています。この超小型衛星による新しい宇宙インフラを早期に構築し、農業、エネルギー、都市計画等の幅広い分野で社会に貢献していきます。

Nakamura Yuya

2007年東京大学大学院工学系研究科 航空宇宙工学専攻
博士課程修了。

H2L

岩崎健一郎 / 玉城絵美

日常をハッキングするように
社会に楽しさを届けたい

私たちは情報学環の暦本研究室の先輩後輩でした。ロボットハンドの研究を行った後、逆転の発想を得て開発に至ったのがコンピュータによる手指の制御装置ボゼスト・ハンドです。これは電気刺激を腕の筋肉に与えることで、人の手をロボット化する装置です。この研究は2011年総長賞を受賞。さらに世界の重要な発明を取り上げる米国TIME誌の「世界の発明50-2011」にも選出されました。

玉城は工学部、岩崎は理学部出身です。人間を使った実験は、ロボットと違いプログラムで試行できないため、膨大な時間がかかります。気後れしていた矢先、岩崎の理学系の発想で『たかだか有限個ですよ』と言われ、『有限個か』と納得して実験を続けたことがあります。結果としていい実験になり、お互いにリスペクトしています。

2012年、そろそろ起業という頃、人づてに鎌田さんを紹介してもらいました。ボゼスト・ハンドの事業化プランについて相談した時、一般商品化するのは大変だけど、面白そうだから、じっくり時間をかけてやってみないか、と。私たちなら何か面白いモノが出来ると期待してもらいました。

東大から未来を創る
アントレプレナーマインドの醸成と課題

ベンチャー支援体制の強化

近年、大学の教育・研究成果を基にしたベンチャー企業が急速に注目を集めており、その重要性が高まっております。毎年500件以上の発明、およそ1,600件の共同研究を行い、新たなイノベーションのタネを創出し続けている東京大学においても、国立大学法人法第二十二条で課せられた「研究成果を普及し、及びその活用を促進すること」という役割を果たすために取り得る様々な産学連携活動のうち、ベンチャー企

業の創出と成長を支援することは大きなミッションのひとつと位置付けています。

2004年の国立大学法人化とともに発足した産学連携本部も、大学の教育・研究成果を基にしたベンチャー企業の創出と成長を促進するため、これまで支援体制の構築と支援の実施を続けてきました。(株)東京大学TLO、(株)東京大学エッジキャピタルとパートナーシップを組むことで知財ライセンスと資金調達における三者連携体制を実現し、2007年設立の「東京大学アントレ



産学連携本部
イノベーション推進部助教
インキュベーション・マネージャー
菅原岳人

2004年東京大学大学院経済学研究科修士課程修了。IBMコンサルタントを経て09年より現職

プレナープラザ」を中心としたインキュベーション施設を運営することで、東京大学関連ベンチャー企業の支援を集中的に行えるようにしました。

支援の内容としては、本学在籍の学生・研究者を対象とした起業相談、インキュベーション施設入居企業を対象とした経営・営業・資金調達サポート、外部プロフェッショナルファームとの連携による法務・会計支援などを提供しています。また、ベンチャー企業創出においてはそれを担う人材



ポゼスト・ハンドを持つ玉城氏（左）とアンリミテッド・ハンドを手にする岩崎氏（右）。

起業の仕方、サーチ、マーケティング、経営についてはUTEC（東京大学エッジキャピタル）で学びました。研究と会社を作るフォーマットは、問題点を発見→解決→マーケットの評価・フィードバック→軌道修正するという流れが同じです。面白い発見でした。

ポゼスト・ハンドはマーケットが追いついてきました。2014年頃にバーチャルリアリティの市場が出来、視覚と聴覚はあるが、触覚がない。触りたいというニーズが見えてきたからです。新たに開発した触感型ゲームコントローラー「アンリミテッド・ハンド」は触感を感じることが出来るウェアラブルコントローラです。クラウドファンディングサイトで初期目標額を大幅に上回る資金調達に成功、世界が注目していると実感しています。

Iwasaki Kenichiro

2010年東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。アークセンチュア、理化学研究所（脳科学総合研究センター）を経て、H2Lを共同創業。

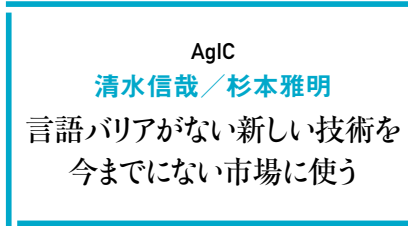
Tamaki Emi

2011年東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。工学博士。12年にH2L株式会社を共同創業。13年より早稲田大学人間科学学術院助教。

の輩出も不可欠です。全学の学生を対象としたアントレプレナーシップ教育プログラム「東京大学アントレプレナー道場」や、主に博士課程生・ポスドクを対象とした事業化構想策定プログラム「EDGEプログラム」なども運営しており、将来の起業家人材の育成にも力を注いでいます。これらの支援活動の現時点の成果としては、教育プログラムには累計で2,000名以上の学生・研究者が参加し、その後80名ほどが起業家となりました。

東大関連ベンチャーは200社以上

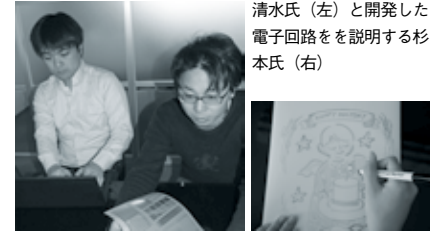
インキュベーション施設には2015年末までに54社が入居し3社がIPO、5社がM&AによるEXITをしており、インキュベーション施設入居企業以外にも含めた東京大学関連のベンチャー企業全体では、「200



大学卒業後はコンサルティング会社に就職しました。ボストンに派遣留学した際、大学時代に親交のあった川原圭博准教授と再会。インクジェット・プリンターを使って電子回路を印刷する技術を研究していると聞いて、事業化出来るのではないかと直感。川原先生もスタートアップに興味関心があり、技術アドバイザーになっていただきました。友人の杉本も起業に詳しいので声をかけて起業しました。

本来、電気回路の製造技術にイノベーションがなく、そこにイノベーションを起こせたらと思いました。コストも従来の電子回路より低く出来ます。ポスターにはインタラクションがありませんが、裏側に印刷した電子回路をつけると触ったら光るとか、スマホと連動するとか。B to Bユースがメインです。来年度は小中学校の教育教材として、全国で採用予定です。小学校4年で学習する電気の基本で、電気回路の実験教材として使っていただきます。

大きさ・軽さがこの電子回路の利点。今まで電子回路が使われていない市場にむけて無限の可能性があり、2024年までに世界で9兆円の市場があると言われてい



清水氏（左）と開発した電子回路を説明する杉本氏（右）

スタートアップは一般的には顧客を分析し、顧客にこれまでよりも便利なプロダクトを提供するという「顧客」にフォーカスした形が多いと思いますが、我々のように「技術」にフォーカスし、新しい技術で今までにない市場を開拓する企業は多くないと思います。プリンティッドの世界では最先端を走っているの、その先には誰もいないという自負があります。

僕らは先輩たちのサポートがあって成長できました。ここにはインターンたちもたくさんいます。僕らのビジネスに共鳴した後輩たちには、先輩がサポートをしてくれるんだと思って欲しい。この連鎖が続けばいいと思います。

僕らの技術に興味があり、一緒にビジネスをしてくださる先輩方がいれば、お声がけください。

Shimizu Shinya

2012年東京大学大学院情報理工学系研究科修士課程修了。マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て14年AgIC共同創業。

Sugimoto Masaaki

2012年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。12年ARビリヤード制作ベンチャーOpenpoolを創業。14年AgIC共同創業。

社以上が創出され全体の企業価値が1兆円を超えた（2015/6/30日本経済新聞）」といわれています。これら創出されたベンチャー企業は、「大学発ベンチャー」とひと括りにされることが多いですが、実際の背景は多種多様です。最近の例では、ペプチドリーム(株)は研究者の研究成果から生まれた企業ですが、(株)ユーグレナなどは創業メンバーの学生時代の研究が技術のコアとなっており、(株)Gunosyは学生のアイデアと技術力の融合から生まれた学生ベンチャーです。このように様々な背景を持つベンチャー企業が大学から生まれており、それぞれに不足する資源や直面する困難が異なる企業群を、人材育成の段階から支援しているのが東京大学におけるベンチャー支援の全体像です。

大学から創出されるベンチャー企業が増加すると、それを支援するリソースは相対的に不足することになります。特にシード期（初期段階）を超えて拡大期に入ろうとしているベンチャー企業には、管理体制の構築、大企業とのアライアンス、営業・技術者人材の確保など、経験豊かな人材が個別の企業に深くコミットしなければ超えられない課題が多く出てきます。こうした学外リソースの活用には、欧米の大学などでは卒業生ネットワークを通じた非公式のメンター、社外取締役やアドバイザーなどの斡旋が活発に行われています。各業界で活躍されている卒業生に、東京大学から未来を創るエコシステム（生態系）に参加していただき、共にこの課題を乗り越えられればと願っています。

「安田講堂の90年」 生まれ変わったシンボル、時代の歩みとともに

第14回 東京大学ホームカミングデイ 特別フォーラム ダイジェスト

2015年度に全面改修工事を終えた安田講堂は1925年の創建から90年を迎えました。歴史的な価値を継承しながら生まれ変わった安田講堂の魅力を、本郷キャンパスの将来像への想いに重ねて語っていただきました。

陣内：このフォーラムでは蘇った安田講堂の価値やすばらしさから、キャンパスのあり方、「知の協創の場」をどうやって構想していくかまで含めて議論していければと思います。安田講堂について、またキャンパスの歴史について一番良くご存知の先生方に勢揃いしていただき議論が楽しみです。

安田講堂の価値を問い直す 歴史を紐解き未来につなぐ

千葉：今回、安田講堂の歴史上最も大規模な改修が行われました。設計は香山壽夫先生、私はキャンパス計画室の一員として全体の監修に関わりました。きっかけは東日本大震災。耐震上の問題から天井を全面的にやり直さなくてはならなくなりました。もともとの設計は、東大のキャンパスにたくさん残るゴシック調のスクラッチタイルを使った建物を設計した内田祥三先生でしたが、途中で弟子の岸田日出刀先生が設計を引き継ぐことになりました。ゴシック調の表現は少し弱まって、当時流行っていた表現主義やアールデコなど、さまざまな様式が混じり合った、ダイナミックで魅力的な建築が生まれた

わけです。しかし度重なる改修で、創建当初の魅力が損なわれていた部分も多々ありました。そこで天井の改修や構造補強を機に、創建時の姿をもう一度取り戻そうと、岸田先生のスケッチや図面を紐解き、写真を確かめながら、設計上の数多くの判断を下したわけです。大学のキャンパスにとって、さまざまな歴史が空間として蓄積することはとても大事なことです。歴史的な価値をどう解釈して未来につなげるか、それが改修の中心的なテーマでした。

もともとの空間や意匠を損なわないように耐震補強を行い、天井はGRGというガラス繊維で補強した石膏ボードで作り直しました。モノとしての建築だけでなく、光も復元しようと、自然光を届けるための改修も行いました。美しい窓も再現してオリジナルな姿を残しています。正面の小杉末醒の壁画も修復しました。可能な限り当初の姿を尊重し現代の機能に応えられる

ようにしました。音響や照明などの設備も、現代の要求に応えられるように変えています。安田講堂は、「災害」によって使われていない期間が長く、立ち直る度にその役割を問い直してきた歴史だったと捉えることもできます。安田講堂は正面性が強いが故に、裏側はより裏っぽくなっていますが、私自身は今回の改修を機に裏の広場を整備して、将来的には学生の拠点として使っていけるような、もう一つの顔として捉え直すことに踏み出すと良いと考えています。

藤井：私は建築の歴史を専門にしておりますので、安田講堂以前の東大の講堂とはどんなものだったかお話しします。3階に天皇が行幸されたときのお休み処、便殿があります。天皇は卒業式に限って行幸する慣例でした。ところが卒業式は文部省の意向で大正8年から中止され、天皇の東大臨幸もなくなった。その際に大講堂ができる。ではそれ以前の東大の卒業式はどこでしてきたのか。当初は虎ノ門の工部大学校。その後、本郷キャンパスに大学が集中してからは工科大学の建物でしています。明治25年に図書館ができ、30年ほど閲覧室で卒業式をした。大正初め、法文の八角講堂ができ、八角講堂でやっているうちに卒業式は中止になった。東京大学にはもともと正門はなく各大学が点々と建設された。明治45年に正門の位置が確定するまでは全体をまとめる発想はなかった。本部はどこにあったのかわからない。安田講堂は東京大学の講堂と総長室としてつくられ、創立以来45年を経過して本部としての顔を持った。中止された卒業式は大正13年から学部ごとに再開、昭和2年から安田講堂で全体の卒業式が再開された。まとまりが悪かった東大本郷のキャンパスに正門・大講堂の中心軸ができた。欧米の大学の式典場、オックスフォードは17世紀の建築で東大によく似ている。式典場であると同時にパーティや音楽会などいろんな催し

を継続的にしている。安田講堂が竣工してきれいになりましたので、欧米の大学のように開かれて楽しく使えるよう、使用頻度を高くしていくことができればと思っています。

吉見：私は社会学者、文系の人間です。東京大学の文書館、大学のアーカイブの仕事もやっています。改修までは安田講堂の上の塔に貴重な資料を収蔵していました。文書館には高い壁が大切で、ストックホルム図書館の壁面のようなところに並べるのが夢です。知識の蔵ができる、それが文書館の目標です。文書館に安田講堂の利用頻度を調べてもらいました。1928年から卒業式を毎年している。創立記念祝賀式、各学部合同学術講演会。入学式は1940年までやっていない。1937年以降は、紀元節、天長節など国家的な祝祭日の式典をやっている。

戦後、南原繁先生は東京大学から池之端、小石川、湯島、神保町をつないで、オックスフォードのような文教地区を作ろうと、丹下健三、岸田日出刀さんと構想していた。戦災復興計画の一部で、本学を中心にして上野公園、小石川植物園に及ぶ一大地区を文教地区にすると。鷗外の小説『雁』の主人公の散歩のルートマップすると、鉄門を出て不忍池、湯島、秋葉原、駿河台を通って赤門まで戻ってくる。このルートを鷗外は毎日歩いている。こういうつながりの中で、この地域を考えることが大切です。この構想は実現せず大学紛争の時代に入っていきます。大学紛争がいつ始まっていつ終わったか調べると、授業日程と連動していた。大学の内と外に壁があって、中は大変なことになっていても、外とのつながりはどれだけあったのかという問が生じます。

地域と大学との関係について、裏側の上野公園や湯島、谷中・根津・千駄木に向かっていく側が大切です。上野と本郷にある学術施設・文化施設をつなぐと世界的に他にない巨大な学術・文化・知の森が出来ます。半径2km圏に全

安田講堂…〈塔〉から〈蔵〉へ 「東京文化資源区構想」

本郷キャンパスにおける安田講堂



陣内秀信

(1971年工・建築)
法政大学デザイン工学部教授



藤井恵介

(1976年工・建築)
東京大学大学院工学系研究科教授



吉見俊哉

(1981年教養)
東京大学大学院情報学環教授



千葉学

(1985年工・建築)
東京大学大学院工学系研究科教授

出来事を中心としてのホール キャンパスを地域に開く 鍵は第二食堂

部納まっている。2~3時間で全部歩ける距離。そこで「東京文化資源区構想」というのを勝手に立ち上げまして、志を同じくする方々と議論を重ねて来ております。1964年の東京オリンピックで東京の文化的中心は北から南に移った。2020年のオリンピックの後、何をしなければならないのか。私は、東京の文化的中心を北に戻す、高度成長以降のアメリカンカルチャーの南から、歴史的な蓄積をもった北に戻ってほしいのではないかと考えています。

その時本郷というの、とても重要な場所なのではないか。とても重要な場所なのではないか。その時本郷というの、とても重要な場所なのではないか。

千葉：30年前、香山先生のもとで安田講堂の裏に博物館を作ろうという案を作りました。安田講堂の裏側をより開かれた場にするには、第二食堂が鍵だと考えています。第二食堂は本郷キャンパスに潜在する二つの軸線が交わるところで、建物に曲面が使われています。第二食堂がいい形で改修され、学生の集まれる場所になれば、根津や谷中につながって町と親和的に発展する。安田講堂の展開は、地域にとって大きな意味を持つと思います。

藤井：外国の歴史のあるキャンパスに行きますと、オーソドックスな立派な建物が揃っていて、それを新しい現代的なニーズに従いながら、都市計画的手法をもって新しい建物を入れキャンパスを変えていっている。東大は今、安田講堂も含めていい状態にあり、うまく使ってうまく変えて、しかも外と連携する条件が揃っています。

陣内：海外の大学へ行くと歴史と風格のある建物群がある。古い建物をうまく転用している。東大は本郷通り側に新しい建物が出て、伝統的なものと新しいものとのバランス、魅力が生まれている。

吉見：本郷通りに向けた表の顔とは違うもう一つの軸、もう一つの顔がありうる。第二食堂をキーポイントに根津や池之端、湯島の方に坂を

下りていくと不忍池、根津、湯島と水の辺、海の辺です。坂を下るときにどういう顔を東大は持つべきなのか、そういうデザインがあるべきだと思う。第二食堂から病院の横を池之端門に向かうルートが重要です。

陣内：建築の研究室時代、坂を上がり下りして地形を感じながら上野にお花見に行った。上野とは共通した歴史的文化的背景を持っているのに分断されている。本郷、西片町には学者の方が住んでいる。これからは武家屋敷ではない町人・庶民の世界、民衆のアクティビティ、そういう世界と一緒にやることが大切です。

千葉：根津側のキャンパスがどうなっているか、ご存知の方は少ないと思います。かなり悲惨な状態です。今後大学はいろんな形で地域社会とつながっていくことが必要です。学問上も、空間としてもきちんと地域とつながっていくためにも、境界のデザインが並行して進められないといけないと思います。

藤井：学内の研究室が、目立たないのですが根津側に点々と小さなスペースを借りて出ています。都市型の大学は大体そういう仕組みを持っていて、町の中にキャンパスが融合していくところがある。囲い込むキャンパスではなく都市と一緒に何かが出来るような、都市の中に侵食していくような、融合していくようなそういう形、可能性も多分にあると思います。

陣内：ヨーロッパの都心型キャンパスは街区・街路にはまり込んで建物が配列されていて、町とキャンパスが一体となっている。東大は屋敷構えで、それが一種のアジュール、自由な空間だったかもしれませんが、それを開いていかないといけない時代となっている。学生が町と一緒にいろいろなことを考えている、周りの人も大学と交流する、そういうキャンパスのあり方を考えなければならない。それから食堂のあり方、もっと楽しくオープンに魅力的にということも重要なテーマだと思います。

千葉：本郷の食堂は地下にあるのが多いですね。学問領域も複雑になっていく中で、学生同士の接点や交流が重要になってきています。そういうとき、食堂のような場所は地上にあった方が

いい。中央食堂はアーカイブにし、安田講堂の裏側も、将来に向かってはカジュアルに開かれた場にするというのが理想の姿です。

吉見：今日の私のタイトル「塔から蔵へ」の「蔵」のイメージは、リゾーム（根茎）です。知の根がいっぱい地下にあってそれがつながっている。学生は知の蔵から養分を吸って育っていく。千葉先生のお話に光が大切だということがありました。安田講堂の中に外の光を取り戻す、全く同感で、知は光なり、光は知識のメタファーですから、光と大学の知というのは根本的に関係している。光はどこからも来る、上からも下からも、右からも左からも、東から西からも、そういうキャンパスを作ることが大切ではないかと思っています。

陣内：特別フォーラムの締めくくりに、東京大学名誉教授の香山壽夫先生にコメントをいただきます。建築学科で長く教鞭をとられるとともに、建築家として素晴らしい公共建築や学校建築をたくさん作って来られました。伊藤国際学術研究センターの設計など、本郷キャンパスに深く関わっておられます。

香山：今日のシンポジウムを伺っているいろいろのことを思いました。この建物を中心にして北側に拡げていくことはこの建物がもともと持っていた遺伝子です。この建物を建てるとき理学部を裏にすると何事かという議論があった。内田先生は裏にするのではない、これは新しい中心を作るのだ。それが今回初めて実現しました。しかし今下に行ってみるとまだ寂しい。入学式、卒業式、式典を講堂でやるというのは日本の特殊事情です。アメリカの大学でホールと名のつくところは、式典もありますが、シンポジウム、音楽会、映画、演劇といろんなことをやる。それが魅力で学生が来る。それが魅力で大学の周辺にはいろんな人が集まる。老人が集まる。なぜ来るかという大学にはいろんな出来事があるから。出来事を中心はホールです。本も読める。博物館もある。今度の改修で初めて所期のものが一応完成しました。しかしやるべきことが残っているのではないかと。シンポジウムをお聞きしながら感じたことです。

同窓会だより

同窓会活動・設立レポート

01 フィリピン赤門会発足

11月22日(日)、フィリピン人留学生を含む約40名の参加を得て、フィリピンで初の同窓会を開催しました。参加者全員による自己紹介後、今後継続して同窓会を開催することで合意し、名誉会長に石川和秀在フィリピン日本大使、会長に天野善夫様(三菱商事)にご就任いただくことになりました。皆で東大野球部のTV特集番組を見たり、「ただ一つ」を合唱する等して、母校に想いを馳せました。開催前の不安をよそに、懐かしい話で盛り上がりました。同窓会としてスタートしたばかりですが、卒業生の交流を深める素敵な会に行きたいと思えます。[山田直樹(02年経済)]



会場となった天野邸で。

02 タイ三同窓会
合同でAlumni Festival開催

恒例の全員写真。

12月10日(木)、バンコクにて東京大学同窓会が行われ、タイに存在する三つの東大同窓会組織から各代表者と会員が集まりました。このように全学へ拡大した同窓会の開催は2011年10月から数えて4回目です。これに先立ち同窓生3名による各専門分野でのセミナーも行われました。各同窓会からは、1960年代~2000年代卒業までの同窓生や関係者等総勢39名が参加しました。タイの政府機関や大学、産業界で活躍するタイ人同窓生22名とともに、現地の企業や大学、国際機関等に勤務する17名の日本人や、日本とタイ以外の国の出身の同窓生らも集いました。大和裕幸理事・副学長及び藤井輝夫生産技術研究所長からのメッセージが参加者に紹介された後、懇談に入りました。途中、各同窓会の代表からの挨拶とともに、参加者全員から一言ずつ東大の思い出や近況を語ってもらう時間もあり、同窓生達にとって旧交を温め

合うと共に、新たなネットワークを結んだ意義のある素晴らしい会合となりました。
[川崎昭如(生産技術研究所特任准教授)]

03 東大スポーツ愛好会
50周年記念パーティ

創設50周年を迎えたスポーツ愛好会は、1月23日、駒場キャンパスにおいて記念パーティを開催しました。昼前からバレー、バドミントン、バスケ、フットサルを駒場第1体育館で楽しんだ後、駒場生協食堂でのパーティには、寒い中、昭和40年代のOB・OGから現役諸君まで、総勢428名が参加しました。記念に作成したスポ愛オリジナルTシャツを着て、昔の仲間、先輩、後輩達との再会を喜び、近況を語っているうちに、パートごと、年代ごとなどの記念撮影会になっていきました。最後は、「ただ一つ」、「スポ愛の歌」の大合唱から恒例の30本締め。10年後の創設60周年パーティの開催と再会を約束して、無事お開きとなりました。次回は、6月末のOB・OG総合合宿、ホームカミング日のスポ愛イベントでお会いしましょう。[森田博(85年経済)]



誰もが学生気分。一同盛り上がりました。

04 ESS・OB・OG会総会開催

当会(会員数2500名)では7月3日(金)、駒場キャンパス内ファカルティハウスにて恒例のOB・OG総会を開催。会の活動報告、決算、予算の承認とあわせ任期満了に伴う新役員の選任を行いました。前会長の文野千年男氏(66年法)は顧問に就任、新会長には江川雅子氏(80年教養、前東大理事)、副会長には西正典氏(78年法、前防衛省事務次官)ほか2004年卒に至るまでの計6名が選任され、役員が大幅に若返りました。議事終了後は前公正取引委員会委員長の竹島一彦氏、APIコンサルタンツ社長の松本洋氏による先輩講演会、その後ルヴェンヴェールに会場を移し、江川新会長の挨拶、橋本徹顧問(57年法)による乾杯挨拶、現役部長による活動報告があり、100名を超える先輩会員・現役学生を交えて盛大かつ和やかに懇親交流会が行われ

ました。当会では2017年にはESS創立70周年(OB・OG会創立50周年)を迎えます。10月には創立記念プロジェクト・チームも発足、会の一層の活性化に向けて積極的に取り組んでいく方針です。[文野千年男(66年法)]



新旧会長を交え全員で記念撮影。

05 「五月祭」賛助のお願い

今年5月14日(土)・15日(日)本郷キャンパスで開催します。賛助いただいた皆様には、ご希望によりお名前を掲載させていただきます(3月25日(金)締め切り)。

[お問い合わせ]

五月祭常任委員会 03-5684-4594

E-mail: nego@gogatsusai.jp

新規登録団体のご紹介

創域会(大学院新領域創成科学研究科同窓会)
学部・学科同窓会/会長 松浦宏行さん(06年新領域院)

奈良東大
地域同窓会(奈良県)/会長 木部義人さん(65年法)

フィリピン赤門会
フィリピン在住者の会/会長 天野善夫さん(82年工)

UAE赤門会
UAE在住者の会/会長 藤木完治さん(78年理院)

東大切手研究会
切手に関する調査・研究/会長 新井紀元さん(64年医院)

1965卒業学年連絡会
1965年に卒業した同期生の会/幹事 長崎新一さん(65年法)

登録団体数 286 (2016年2月5日現在)

学部等同窓会	45
地域別同窓会	49
海外同窓会	49
運動会	29
文化サークル	16
職域特定分野同窓会	37
クラス会(専門課程同期会)	10
クラス会(駒場)	51

東京大学基金

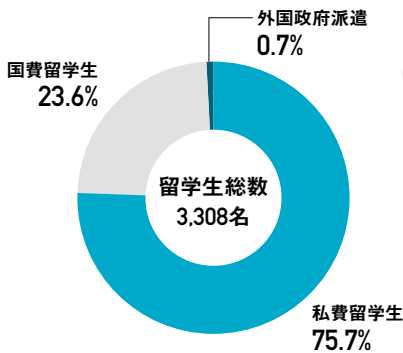
東大の留学生数3,308人、全学生数の12%を占める!

2015年11月1日現在、東京大学に在籍する外国人留学生の数は3,308名、全学生数に対する比率は約12%となりました。

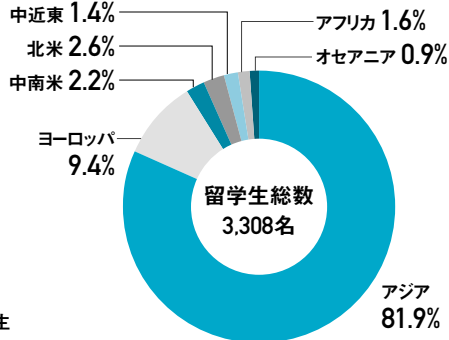
留学生の出身は110の国・地域に及び、まさに世界中から優秀な学生が集う国際色豊かなキャンパスとなっています。

留学生は、五神総長が掲げる「東京大学ビジョン2020」の基本理念の一つ「多様性」を生み出す存在です。

平成27年度外国人留学生種別内訳



平成27年度外国人留学生地域別内訳



外国人留学生国籍別内訳(上位20カ国)

国籍	人数	国籍	人数
中国	1470	フィリピン	39
韓国	470	シンガポール	37
台湾	157	スリランカ	33
タイ	125	ネパール	28
インドネシア	74	バングラデシュ	27
インド	71	ブラジル	25
アメリカ	68	ミャンマー	24
フランス	66	オーストラリア	24
ベトナム	61	イギリス	21
ドイツ	47	その他(90カ国)	397
マレーシア	44	合計	3,308

※資料は、いずれも平成27年11月1日現在、留学生・外国人研究者支援課調べによる。

留学生のセーフティーネット「外国人留学生支援基金」へご支援ください。

「外国人留学生支援基金」は、東京大学基金の中で最も歴史のある寄付プロジェクトです。1997年に起こったアジア通貨危機の際に、生活不安に陥った留学生を少しでも助けたいという大学関係者の思いから発足しました。本基金では、奨学金だけではなく、授業料免除申請不許可時や奨学金入金までのつなぎとして貸与する「一時金貸与事業」、事故・災害での被害や入院などの不測事態に対する

「見舞金給付事業」などを実施しています。これらの事業は、異国の地で留学生生活をする留学生のセーフティーネットとして機能しています。しかし、近年、本基金への支援が減少してきており、このままの状況が続けば各種事業の規模縮小を検討せざるを得ない状況です。留学生の数が増える中で、本基金の維持・拡大は必須です。卒業生の皆さまからのご支援をお願いいたします。

外国人留学生支援基金の3事業

奨学事業(月額5万円)

年間30人採用
累計約500名の大学院留学生へ給付

見舞金給付事業(10万円以内)

支給実績: 14名
・隣室からの出火によって家財に損害した留学生へ
・海外実習中のけがの治療費にあてるため

一時金貸与事業(原則20万円以内)

支給実績: 113名
・授業料免除不許可だった留学生へ
・不測の事態で家賃を支払えなくなった留学生へ

留学生の声

奨学金

るえい
呂瑩さん
農学生命科学研究科
修士課程1年
中国出身



中国での学部時代の台湾留学で、日本の影響を受けた台湾がとても魅力的であったことから日本への留学を決意しました。しかし、日本での留学生活は決して簡単ではないことを来日してから実感し、中国の実家にできるだけ迷惑をかけないようにアルバイトをしました。アルバイトをしながら勉強を続ける日々、人生で初めて「辛い、もう諦めたい」という気持ちが生じましたが、頑張って我慢しました。辛くとも一生懸命夢を実現したいという生き方を初めて意識しました。留学生支援基金奨学金を受けることで、ようやく研究に専念できるところです。大変感謝しています。科学研究は私の夢であり、これからの生き方でもありますから、何があっても絶対諦めません。

見舞金

カレル
ディベシュ
KHAREL DIPESHさん
学際情報学府
博士課程3年
ネパール出身



ネパール・カトマンズでフィールド調査中の2015年4月25日、ネパール大地震に遭遇しました。幸い怪我は大したことはなかったのですが、研究資料を保存した大事なコンピュータが壊れてしまいました。個人的に保険に入っていなかったため、支援基金から見舞金をもらえることになってありがたかったです。学生を守るというのは大学の責任かもしれませんが、それを皆さんの寄附で支援して頂いていると知って、暖かみを感じ、精神的支えも得ました。東大コミュニティの一員であることを実感しました。まだ母国の復興も進んでいませんし、私の精神的ダメージも十分回復できていませんが、この支援を励みに論文を仕上げたいと思います。

ご寄附のお申込み

払込票をご利用の場合 / 同封の「払込取扱票」に必要事項(※印欄)をご記入のうえ、各金融機関よりお振込みください。「寄附目的」の欄を必ずご記入ください。

インターネットをご利用の場合 / 東大基金のホームページからお申込み下さい(クレジットカード決済、インターネットバンキング決済、銀行振込決済)。



東京大学基金事務局 電話: 03-5841-1217 Email: kikin@adm.u-tokyo.ac.jp 東大基金ホームページ: http://utf.u-tokyo.ac.jp/

編集発行／東京大学卒業生室
大和裕幸(卒業生室長)
アートディレクション／細山田光宣
デザイン／相馬敬徳
表紙イラスト／門坂 流
印刷／図書印刷
発行／2016年3月9日

東京大学校友会事務局
〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
TEL:03-5841-1227
FAX:03-5841-1054
Email:utaa@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
URL : http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/



第15回東京大学 ホームカミングデイは 10月15日(土)

年次同窓会を同日開催! 今年は最大規模6学年が集まります

卒業20周年学年会

1992年(平成4年)入学
1996年(平成8年)卒業
1996年(平成8年)院入学
1998年(平成10年)医学部卒業

卒業25周年学年会

1987年(昭和62年)入学
1991年(平成3年)卒業
1991年(平成3年)院入学
1993年(平成5年)医学部卒業

卒業30周年学年会

1982年(昭和57年)入学
1986年(昭和61年)卒業
1986年(昭和61年)院入学
1988年(昭和63年)医学部卒業

卒業35周年学年会

1977年(昭和52年)入学
1981年(昭和56年)卒業
1981年(昭和56年)院入学
1983年(昭和58年)医学部卒業

卒業40周年学年会

1972年(昭和47年)入学
1976年(昭和51年)卒業
1976年(昭和51年)院入学
1978年(昭和53年)医学部卒業

卒業45周年学年会

1967年(昭和42年)入学
1971年(昭和46年)卒業
1971年(昭和46年)院入学
1973年(昭和48年)医学部卒業

以上各周年学年会に該当する同期学友の方

ホームカミングデイに関するお問い合わせ
東京大学校友会 utaa@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

東大HCD

検索